

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

諫早湾干拓：副農相来県 漁民ら悲痛な声

全開門要求相次ぐ

【毎日新聞2月16日】国営諫早湾干拓事業（諫干）開門問題を巡る15日の筒井信隆副農相来県。地元との意見交換などが目的だったが、漁民らが求める全開門の実現に向けた前向きな回答は最後までなく、漁業被害に苦しむ漁民らは落胆の表情を見せ、悲痛な声を上げた。

「政権交代が実現し大喜びした。私たちの声を何度も聞いてくれた筒井副農相の就任も歓迎したが、一向に変わる気配がない。副農相になるところも変わるのか……」。佐賀市で開かれた開門訴訟原告団の漁民との意見交換会で、同市川副町でノリ養殖業を営む川崎賢朗さん（51）は目の前に座る筒井副農相に訴えた。

県沖の有明海では今季、秋は赤腐れ病、冬はプランクトンの発生などでノリ養殖の不漁が続いている。「開門しない限り、被害は出続ける。一刻の猶予もない」。川崎さんはそう訴え、早期開門を求めた。

一方、鹿野道彦農相の来県について、筒井副農相は「大臣も都合を付けて来たい、という意向がある」と前向きな姿勢を見せた。

この日午前、筒井副農相は白石町で自治体の代表者や漁民らと意見交換。古川康知事が「有明海が昔と違ってし

まった原因究明が必要。開門すればいいと思っただけではなく、再生につなげてほしい」とあいさつすると、副農相は「国は開門義務を負っている」と応じる一方で、全面開門には消極的な姿勢に終始した。これに対し、この会場でも漁民からは「判決が確定しても一向に話が進まない。早く全開門を実現してほしい」「全開門しなければ結果が出ない」など、全開門を求める声が相次いでいた。



冷凍網ノリ養殖 有明海全域で色落ち 佐賀県西部で被害拡大



色落ちして黄緑色になった佐賀海苔。

【毎日新聞2月10日】県内の冷凍網（冬）ノリ養殖で、県沖の有明海のほぼ全域に色落ちが広がっていることが、県有明水産振興センターの調査で分かった。東部は一部地域だが、西部で被害が大きく、センターは今後、調査回数を増やすなどして経過を注視していく。

センターの調査によると、県西部ではスケレトネマという珪藻（けいそう）類のプランクトンが、東部ではユーカンピアという種類が増えている。大潮のため、栄養の少ない沖合の水が河口付近に流入している影響もあり、成長に必要な栄養が減っている。赤潮が確認されている県西部は特に被害が大きいという。

今季の冷凍網ノリ養殖は、昨年12月末より今年1月中旬に色落ちが拡大。いったん縮小したが、再び拡大傾向に向かつており、養殖業者らが危機感を強めている。

珪藻類のプランクトンは春が近づくにつれて増殖傾向が強まるため、センターは「状況を注視したい」として調査回数を増やすなどして対応する方針。

有明海魚介類激減「国は本格調査を」柳川の採貝漁師ら、副農相に陳情書

【毎日新聞2月21日】柳川市沖の有明海の魚介類が激減していることを受け、採貝漁師らが結成した「有明海復活・再生の会」（古賀春美代表）がこのほど、本格的な原因調査を国に求め、同市を訪れた岩本司農水副大臣に陳情書と6542人分の署名を手渡した。古賀代表は「昨年秋に有明海で貝の大量死が起きた。3カ月以上漁に出られず、生活できない。県に要望しても原因が分からず、国が調べてほしい」と窮状を訴えた。岩本副大臣は「有明海の潟に大量の砂をまくなどの対策をしてきた。その効果がないのなら、別の対策を考えたい」と述べた。会によると、有明海では最近20年で二枚貝や魚の漁獲量が減少。特に高級二枚貝は、アゲマキがほぼ全滅し、タイラギは今漁期中も不漁が続いている。これまで年中、大量に採れていたアカガイの仲間、サルボウの大量死が昨年10月に分かり、採貝漁師らが「生命力の強い貝まで原因不明で弱って死んでいく。異常な死の海になった」と危機感を持つた。主にノリ以外の漁師らが集まり、大量死の原因究明と対策を求める同会を結成し、1月から署名活動をしてきた。